

流へと2キロほど下りました。シユマーハラコシという小川を過ぎ、2キロほどでサツテキという野道の途中に渡った小川がありました。400メートルほど進むと5人が暮らすトノトク家と、4人が暮らすトントン婆さんの家の2軒があり、それぞれに針と糸を与えてさらに先へと進みました。クツタルシ、そしてその先のトミタビラは昔戦いがあつた場所だといい、石の矢じりや石の斧を拾うことがあります。私も3枚拾いましたが、大雪の後は石器や土器などを拾うこともあります。

その先650メートルほどとのころに人家が2軒ありました。2人家族のホキシロマ家、8人家族のアイニ家です。そこから540メートルほどで、大川がふたつに分かれる中州に位置するマクンベツに1軒、4人家族のアリケウトム家を見て、そこからさらに400メートルほどアシリビラという大きな崖があり、その上からは向こうにカブチヤ川、こちら側にはニトマフという小川です。

ここまで来ると、私たちが今日到着するということを当地のアイヌが前もって知つており、2人を道の途中まで迎えに出してくれたのに出会いました。それというのも、村への道は本道ではなく、

狹の道が1本あるので、迷つてはいけないという心遣いをしてくれたのです。その行き届いた心遣いに私たちは感銘を受けました。600メートルほどで3軒の人家があり、23人が暮らしており、いずれも長老アラユクの一族だといいます。

アラユクは74歳で、大形で薄緑色をした絹織物の広い袖の着物の上に、中国製の錦の陣羽織という立派な服装でした。そして2人の子どもに太刀と、刻みタバコが600グラムは入る大きさの煙草入れを持たせ、肩を覆う白髪、ひざが隠れるほどの長いひげを撫でながら、杖をついて私たちを出迎えてくれました。その姿といえど、心が穏やかでゆつたりとした貫禄があり、いかにも領内の長老といったところでした。



アイヌの煙草入れ

たばこはアイヌの人々に嗜好品として親しまれており、儀礼の時にも使われた。